



Title	白井晟一の自邸「虚白庵」の原型について
Author(s)	羽藤, 広輔
Citation	デザイン理論. 2020, 75, p. 50-51
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/75339
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

白井晟一の自邸「虚白庵」の原型について

羽藤 広輔 信州大学

1. はじめに

本研究では、建築家・白井晟一（1905–1983）の自邸「虚白庵」（1970 年竣工）を対象に、その原型を探索するとともに、白井伝統論の発展経過との関連を考察する。なお、SZB I・II, SZH は『白井晟一全集』別巻 I・II, 補遺（同朋舎出版 1988）を示す。

2. 「虚白庵」の概要

「虚白庵」は、背の高い塀で囲まれ、前面道路に対して閉鎖的な立面を形成している一方、敷地奥には和風の中庭がある。建物の平面は、L 字型に展開されており、北側に窓の少ない仕事場が、西側には開放的な食堂・居間が配置されている。内部空間の印象は暗く、照明によって浮かび上がる多くの美術品や家具類が、空間を特徴づけている。また、白井は、1960 年頃から書に没頭し、「虚白庵」は完成以降、その主要な実践の場となった。

3. 「虚白庵」の原型について

・白井作品の系統における「虚白庵」の位置

「虚白庵」は、白井の住宅作品の系統では、捉えにくい作品であり、その系統をあえて挙げるとするならば、それは「原爆堂計画」（1955）の系統ということが言える。このことは、白井自ら、「原爆実験住宅」（『朝日新聞』1970 年 1 月 30 日東京夕刊）や「原爆時代のシェルタア」（SZB I：344）と言及したことからも窺える。より詳細に「原爆堂計画」を観察してみると、施設の中心となるテンプル棟よりも、エントランスを含むミュジ

アム棟の方に「虚白庵」との類似点を読み取ることができる。例えば、並行な 2 枚の板にはさまれた空間構成、玄関付近の軒まわりの意匠、片側のみではあるが緩やかに傾斜する屋根といった要素が挙げられる。「虚白庵」の食堂部分が開放的なのはミュージアム棟中央の半戸外部分の名残と見ることもできよう。

・中庭式の構成

1962 年の新聞記事に、白井を取材した記者による注目すべき次の一節が見られる。「もしこんど家を建てるなら、ローマの家のように中庭式の家で、そこに京都の禅寺ふうにかワラを敷きつめる。家具もできるだけ少なくし、静かなすまいを作りたいといっていた。」（『朝日新聞』1962 年 10 月 31 日東京夕刊）

まず「ローマの家」が何を指すかについてであるが、「中庭式」の説明として用いていることから、ポンペイの遺跡等に見られる古代ローマのドムス（domus）を指しているものと考えられる。この建築では、前面には軒の出のない壁面中心のファサードが構成される一方、奥の中庭には、軒のあるアトリウムやペリスティウムが形成されており、「虚白庵」の構成に通ずるところがある。一方、中庭のイメージは、禅寺の庭から出発していることが確認でき、完成した庭の細部からもその関連を読み取ることができる。

・暗闇の中に浮かぶ美術品や家具類

「暗闇」について、悪化した周囲の環境から身を守るという受動的な経緯もあった（SZB I：344）が、むしろ自身の思索に集中するために適

した空間を求める能動的な要因があった（SZB I：167）ことが読み取れる。また、家具や美術品類を持ち込んだ経緯について、写真や書物からでは、つかみきれない歴史文化に対し、その実物を自らの傍に置くことによって、これを学び、体得するための「教材コレクション」であった（SZB I：127, SZB I：183）ことが読み取れる。

さらに、美術品類が暗闇の中に浮かぶような構成については、ゲーテの『イタリア紀行』に興味深い一節を見つけることができ、影響の可能性が指摘できる。「松明による照明の利点。各作品を一つ一つ他の作品から切り離して観察できること、観照する者の注意がひたすらその作品だけに向けられることである。（中略）しかし最大の利点はたしかに、不利な場所におかれた作品がこれによって、それにあたえられるにふさわしい権利を獲得することである。」（『ゲーテ全集 11』, 潮出版社, 2003, p. 364）

4. 伝統論との関連

ここでは、筆者が取り組んできた白井伝統論の発展経過の関する研究結果（「建築家・白井晟一の著作にみる伝統論」日本建築学会計画系論文集 80（712）, 2015.6, pp. 1411-1418／「建築家・白井晟一の著作にみる習書の意味：伝統論との関連に着目して」日本建築学会計画系論文集 81（719）, 2016.1, pp. 179-186／「白井晟一の活動における建築作品をめぐる言説と伝統論の関連について：作品説明文に着目して」日本建築学会計画系論文集 81（730）, 2016.12, pp. 2841-2847）に基づき考察を進める。

「虚白庵」は1967年から計画され1970年に竣工しているが、構想自体は1960年代前半から存在していたものと考えられることから、「虚白庵」は、白井伝統論「展開期」（表1）の経過とともに構想され、その集大成として完成した建築と考えることができる。白井伝統論「確立期」から「展開期」への変化は、対象を来歴や形に惑わされず

に、純粋にそのポテンシャルを捉えようとする態度から、その姿勢は保持しつつも、ユーラシアや東洋といった具体的な対象に触れながら、世界の古典を自身に内在するものとして捉えようとする姿勢への発展であった。本人の意図として「原爆堂計画」は、具体的なモチーフから離れた純粋な造形であったのに対し、「虚白庵」では、「原爆堂計画」で創出したボキャブラリーや空間構成を基に、古代ローマや禅の庭に通ずる要素が加えられ、内部には、実用的なコレクションとして世界の古典が文字通り内在した。

「虚白庵」は白井自身を身体化したものと捉えることができる。そこでは、歴史上の書を不断に勉強しつつ、自身を無心の境地に追いこみ、そこで意識を超えたものを取り出そうとしていた習書の活動と同様に、建築の制作においても、教材コレクションとして収集された世界の美術品や家具類を傍らに置き、文字通り、自身に「内在する」ものとなるよう、それらと向き合いながら、時間や空間を解放した創造意識の中で設計活動に取り組んだものと考えられる。

表1：白井建築作品・伝統論関連表（SZHを基に作成）

	建築作品	伝統論関連事項	白井伝統論区分
1937	歓歸荘		導入期 (~1955)
1952	滴々居	講演記録「華道と建築」	
1953	試作小住宅		
1955	原爆堂計画		
1956	松井田町役場	工「縄文的なるもの」、工「豆腐」、工「めし」	確立期 (1956)
1957		「伝統拡大」論（対「『ギリシャの柱と日本の民衆』を読んで」）	展開期 (1957~1970)
1958	善照寺		
1960		書に集中するようになった	
1965	呉羽の舎		
1967	親和銀行本店 第1期		
1969		「ユーラシア的」スケールへ（対「『西洋の壁』を突き破ろうとした建築家の哲学と作品」）	
1970	虚白庵	第一回顧之書展、『顧之居書帖』	晩期 (1971~)
1975	懷骨館		
1981	石水館		

※工：エッセイ、対：対談記事